ホア　ビン　(平和)
HOA BINHレポート

JVPF 特定非営利活動法人 日本ベトナム平和友好連絡会議
NPO Japan Vietnam Peace and Friendship Promotion Council
〒162-0801 東京都新宿区山吹町316番地菊地ハイツ101　TEL 03-3268-4387　FAX 03-3268-6079
#101, Kikuchi Haitsu, Yamabuki-cho, Shinjuku-ku, Tokyo, Japan TEL(81)3-3268-4387/FAX(81)3-3268-6079
http://ifcc1985.com　jvccpf@rmail.plala.or.jp

59 号　2025 年 7 月

会費／正会員：(個人)5,000円 (団体)50,000円 口座名／特非)日本ベトナム平和友好連絡会議
◎郵便振替 00110−2−188872 ◎三菱UFJ銀行・江戸川橋支店(普通)1215225
◎ゆうちょ銀行・〇一九(ゼロイチキュウ)店(当座)188872

ベトナム解放・統一 50 周年／記念訪問団と JVPF 第 18 回総会

再び JVPF の活動の原点を見つめて

1975 年4月 30 日、北正規軍・解放戦線がサイゴンに入城、大統領官邸に突入して、ミン大統領は無条件降伏を要求された。この時「ベトナム共和国」は消滅、再統一された。あれから 50 年を経てベトナム全国が祝賀に満ちあふれている4月 29 日から5月4日に「ベトナム南部解放記念JVPF訪問団」が実施された。日程は、ホーチミン、デイエンビエンフー、ハノイと民族解放の歴史をたどる旅となった。

ホーチミン市では「戦争証跡博物館」を見学、アメリカ軍のソンミ村虐殺などや枯葉剤被害の実態と暴虐性を鋭く告発していた。《JVPF主催 50 周年祝賀会》にアンサンブルコンサート参加者やグエン・ドクさん(枯葉剤被害者)が参加頂いたことは、JVPFの活動の支柱である枯葉剤被害者支援が重く受け止められていることを痛感した。訪問団の大きな目的である 30 日の《式典見学》は会場での参観はできなかったが、「ベトナム国旗をデザイン」したTシャツを家族で着て、パレード見学をする多くのベトナム市民の歓喜に触れ、夜は花火が打ち上げられ市は解放の祝賀に包まれていた。解放戦線司令部跡(クチトンネル)で地元ガイドの「サンダルの原料は横浜タイヤ」の説明にベトナム戦争での日本の加担を痛烈に批判する思いを感じてしまった。

デイエンビエンフーは、難攻不落と言われたフランス軍要塞基地をベトミンが逆包囲をして 55 日間にわたる攻撃で陥落させ、第 1 次インドシナ戦争に勝利し、フランス軍が撤退することになる著名な戦地である。ベトミン軍事司令部跡や激戦地・フランス司令部跡(塹壕)を見学した。

ハノイでは、「独立宣言」をしたバーティン広場の一角にあるホーチミン廟内の見学を予定していたが予想を超える長蛇の列で入館が困難のため近接するホーチミンが「独立宣言」を準備した住居跡やベトナム歴史博物館、ホアルー収容所跡、100 万人餓死事件慰霊碑などを見学した。また「越日友好協会表敬夕食会」でビン副会長(元駐日ベトナム大使)は、30 日の記念式典参観が実現できなかったことに「お詫び」を述べられた。

上：50 周年記念でホーチミン市を訪れたJVPF グループ、鹿児島 JVPF、尼崎グループ、KVPF グループは 4 月 29 日、グエン・ドクさんやアンサンブルメンバー等招き、祝賀食事会を持った。
右：祝賀食事会にはグエン・ドクさんも招待。
下：5 月 2 日、越日友好協会グエン・フー・ビン副会長夫妻（元・駐日ベトナム大使）や一回目のチャリテイーコンサートのリーダーたちも招待し表敬食事会を開催した。右から山下茂 JVPF 副会長、ビン元駐日大使、山としひろ国会議員、ビンさんの奥さん。

私は、19 年ぶりにベトナムを訪問した。ホーチミン市やハノイ市の高層建築に目を奪われ、かつてはクチトンネルに向かいホーチミン市

【本号の内容】～50 周年記念訪問特集～
・50 周年記念訪問団と 18 回総会報告-*1-2p*
・50 周年記念訪問団報告/尼崎グループ、KVPF,鹿児島 JVPF,-*2-5p*
・JVPF50 周年訪問団・“クチトンネル”、デイエンビエンフー、200 万人餓死慰霊碑-*5-6p*
・ハザン省少数民族学生奨学金支援活動-*6p*
・枯葉剤被害者支援活動―ハザン、トウエンクアン-*7-8p*

1頁より続き

中心部を離れると田園風景で水牛も見られたが、風景は一変して田園は整地化されておりベトナムの変容している姿が強く印象に残った旅となった。

なお、南部解放 50 年に合わせJVPF 訪問団とともに、香川KVPF、鹿児島JVPF、尼崎グループ総勢 38 名がベトナムに訪問してそれぞれの日程と共通行事《50 周年祝賀会》を行った。　　記：田中秀樹

【JVPF第18回総会報告】

表記総会は5月 24 日(土)東京で開催、活動報告・活動計画、活動計算書・活動予算書が満場

一致承認されました。討論では「在日ベトナム人の日本国籍取得が困難」なことや友好活動を次世代の若者に引き継ぐ課題などについて意見交換が行われました。総会後の懇親会には、お忙しい中**ファム・クアン・ヒエウ駐日ベトナム大使(上円内写真)**、グエン・ホン・ディエップ参事官が参加され、大使からは連帯のあいさつを受けて短時間でしたが交流を行うことができました。

2024 年度事業報告

【事業】

1. 教育支援事業(1)―少数民族出身学生奨学金支援

①北部ハザン省の少数民族学校に奨学金を届けました。

②ハザン省ヴイスエン郡公立中学校で「教育未来基金」の寄付で奨学金を届けました。

③JVPF鹿児島支部はJVPF中央と協力し北部バクザン省リュックソン中等学校で 2023 年度から少数民族出身学生奨学金を開始し、年度末となる 2024 年5月 22 日現地を訪れました。

④広島HVPFのクアンチ省少数民族高校で 16 年目となる奨学金支援活動を 11 月 25 日実施してきました。奨学生はこれまで 260 人が卒業していきました。

2. 教育支援活動(2)―村山記念JVPF日本語学校

現在も、教室開設での学校運営に至っていませんが、寄宿学校の形で日本語留学希望生や実習生予定者を対象にした日本語教育を行っています。

3. 国際協力事業(1)―枯葉剤被害者支援のための活動

ハザン省で枯葉剤被害者貧困家庭への「仁愛の家」寄贈を一軒実施してきました。同時に、ツエクアン省で枯葉剤被害者協会(VAVA)、及び被害者家庭2軒で調査・訪問を実施してきました。これは「連合・愛のカンパ」助成とチャリティーコンサート益金及び寄付金で実現できました。

4. 国際協力事業(2)―ベトナム民族アンサンブルチャリティーコンサート

2025 年のベトナム解放統一 50 周年に向けた記念事業として準備し全国 10 会場で 12 回の公演、1回の友好交流会が行われました。10 公演を実施できたことで枯葉剤被害事業のための益金をつくることができました。

5. 国際交流事業(1)―日本語及び日本研修　省略

6. 国際交流事業(2)―文化・スポーツ交流　省略

7. 目的のための必要事業―日越友好植林事業

日中友好会館の 2022 年度助成で「ハザン省日越友好植林事業」を開始し、2024 年度は一期 2 年目、二期11年目を実施してきましたが、三期目の助成が日本政府の意向で停止となってしまいました。現在、一期3年目、二期2～3年目の残務事業を行っています。

8. その他の事業(1)―　省略

2024 年度活動計算書

【A】経常収益	11,920,424
1. 受取会費	890,000
2. 受取寄付金	2,253,100
3. 受取助成金等	8,148,386
4. 事業収益	583,762
5. その他の収益	45,176
【B】経常費用	9,291,752
1. 事業費	7,676,722
2. 管理費	1,615,030
【C】経常外増減額	-5,000
【D】前期繰越正味財産額	-2,592,571
【E】次期繰越財産額	31,101

2025 年度事業計画

【事業】

1. 教育支援事業(1)―少数民族出身学生奨学金支援

①ハザン省ヴィスエン郡少数民族学生寄宿学校で最終年度の奨学金支援を行います。

②ヴィスエン郡公立中学校での 2025 年度の少数民族学生奨学金支援は 20 人の予定です。

③バクザン省のリュックソン中学校での 2025 年度奨学金支援は年度末の 2026 年5月頃予定されます。ハザン省ヴィスエン郡少数民族学生寄宿学校でのJVPFの奨学金事業が 2025 年度で終了することを受け、バクザン省リュックソン中学校で事業を共催することにします。

2. 教育支援事業(2)―村山記念JVPF日本語学校　常設教室を整えた学校再開へ努力していきます。

3. 国際協力事業(1)―枯葉剤被害者支援のための活動

①枯葉剤被害者貧困家庭支援「仁愛の家」寄贈活動は 2025 年度から《枯葉剤被害者家庭の児童支援》としていきます。この基金として「連合・愛のカンパ」の助成を受け進めます。

②被害者の調査・慰問活動を続けます。

4. 国際協力事業(2)―ベトナム民族アンサンブルチャリティーコンサート

見込み通りに進んでおりませんが、継続していきます。

5. 6. 8　省略

7. 目的のための必要事業―日越友好植林事業

ハザン省のプロジェクトの残務作業を行います。

掲示板

“私の体の中では戦争が終わっていない”
枯葉剤被害者支援チャリティーコンサートへ協賛ください。

10 月 17 日(金)藤沢市/市民会館小ホール(昼)
10 月 19 日(日)美馬市/市民ホール(昼)
10 月 20 日(月)神戸市/新開地アートひろばホール(昼・夜)
10 月 21 日(火)(開催地募集中)
10 月 22 日(水)新潟市/ユニゾンプラザホール
10 月 23 日(木)国分寺市/いずみホール
10 月 24 日(金)(開催地募集中)
10 月 25 日(土)東松山市/市民活動センターホール(昼)
10 月 26 日(日)松伏町/田園ホール・エローラ(昼)

Chúc mừng Kỷ niệm 50 năm　祝　50周年

ベトナム南部解放50周年に訪問

ホーチミン～フエ～ハノイ

尼崎訪問団・藤岡正雄

尼崎訪問団は2019年(革命60周年)にキューバへ友好訪問した仲間が呼びかけ10人で結成しました。キューバ訪問団長の今西正行さんは、今回の訪問を呼びかけながら体調が悪化し3月に亡くなられ、本当に残念でした。参加したメンバーも87歳を筆頭に高齢者グループですが、無事に終えることができました。

4月29日関西空港を出発し、夕方にはホーチミン市でJVPF訪問団全員の50周年祝賀会に参加し、グエン・ドクさんと記念写真を撮りました。

30日午前は50年式典のパレードをホテル近くの街路で見物、午後は車で1時間半走って解放戦線の本拠地であったクチトンネルを見学。欧米人も多く、すっかり観光化しています。夜は記念の花火大会があり、サイゴン川のクルーズ舟に乗り夕食をしながら花火を堪能しました。

5月1日はメーデーですが集会やデモはない様子で、私たちは戦争証拠博物館と中央郵便局を見学しました。

博物館は日本でのベトナム反戦闘争の写真もたくさん展示しており、私たちの青春時代を思い出すものでした。

夕方には飛行機で古都フエに移動し、2日は**フエ王宮(上写真)**とティエンム寺を見学。フエは1945年まで続いたグェン朝の首都で、中国文明の影響を強く感じさせます。

夕方には飛行機でハノイに移動し、3日は少数民族学博物館を見学し、100万人餓死事件慰霊碑を参拝。

ホーチミン廟は3時間待ちのため中止しホーチミン博物館を見学、最後の観光としてタンロン水上人形劇を観ました。池で上演するのではなく、館内に水を張った舞台がありました。1000年も昔から伝わるもので、もともとは農民が水辺で演じたものだそうです。これも観光施設化し、多くの欧米人が観劇していました。

ベトナム戦争から50年、ベトナム人の7割は「戦争を知らない世代」だそうです。しかし枯葉剤の被害は4代先まで続き、戦争被害は多く残っています。今、日本で働く外国人労働者の第一位はベトナム人です。これからも日本とベトナムの民衆連帯の発展を願っています。

(記2025年5月24日)

香川KVPFグループベトナム訪問レポート

ハロンベイ～ハノイ～ホーチミン

団長・鈴木義博

今回は香川から7名の参加。昨年開催された「ベトナムアンサンブルチャリティーコンサート」実行委員会に関わり、南部開放・統一50周年のベトナムへとの参加呼びかけに呼応した人たちである。

プログラム的には、初めてのベトナムという方が多かったことから、本来の趣旨からは少し逸脱したものの、統一50周年のベトナムが、どのような変化をしたのか？を知る意味では意義深いものとなった。

一行は、関空から出発して午後の2時過ぎにハノイノイバイ空港へ到着。現地ガイドのNgoc玉さんの出迎えを受け、ちなみにこのガイドさんは、前回の枯葉剤被害者支援に来た時のガイドさんでした。そこからは、韓国製ワゴン車で一路ハロン湾へ向かう。そこで感じたのは、市内の雑踏混雑ぶりは相変わらずだが、ハロン湾へ向かう立派な高速道路が整備されていたことに、まず驚く。

そしてさらに驚かされたのは、ハロン市内の街並みが整備され立派なヨーロッパのリゾートか？と思えるおしゃれなホテル(？)が至る所に…。ただ、行政主導で建築したものの、現実は空きビルが多いのも事実。地理的に中国からの観光客が圧倒的に多く、海鮮系のレストランもたくさんあった。過去にあった中国との軋轢なども、うすらいでいるのかも。

現地2日目はハロン湾観光。そんな観光客の増加の影響か、クルーズ船が出港する港も新しく整備され賑わいを見せていた。船上でのランチも満足いくものであった。

午後は、一路ハノイ市内へ。途中で枯葉剤被害者の家族などが作成するシルクの織物販売店に立ち寄り、少しの支援にと思いお土産を購入。ハノイのホテルは村山元総理も泊ったとのこと。

3日目はホーチミン廟見学の後、**ハノイ市友好委員会(下：写真)**へ表敬訪問。グエン・ゴック・キー議長らの歓待を受ける。多少予定時間をオーバーしたものの、50周年

事業への参加を感謝するとの発言、更なる友好関係を高めるための相互努力を確認するとともに、引き続き枯葉剤被害者への支援を要請された。午後、ホーチミンへ移動し、夜のJVPF主催の50周年前夜祭へ参加。詳細は他県の報告を参照。

最終日、記念事業の式典には参加できなかったものの、軍隊や警察が厳しく警備する街中を現地の人たちと混じり、軍用機が頭上を飛び交い軍隊が行進する状態を垣間見たりして、それに熱狂するベトナムの人たちを見ると、少し複雑な心境になったのも事実。午後は、解放戦線司令部跡のクチトンネルを見学、米軍を苦しめた闘いの一端を見ることができた。

最後に、とにかく至る所で 50 周年を祝うベトナム国旗と共産党の旗が掲揚されており、ガイドさん曰く「強制」ですかね？　（記 2025 年 5 月 27 日）

鹿児島 JVPF/50 周年記念とバクザン訪問

～枯葉剤被害者家庭の慰問～前田秀一

～少数民族学生奨学金贈呈～下馬場学

枯葉剤被害者家庭の慰問

1975 年 4 月 30 日、ベトナム戦争は終結した。

フランスの植民地時代、日本軍のインドシナ支配、フランスとの再度の闘いを経て、統一ベトナムへの道を南ベトナムが拒否し、アメリカがこの政権を後ろ盾で支え、北ベトナムへの爆撃を繰り返し、実に 785 万トンの爆弾を使用した。物量では第 2 次世界大戦をしのぐ史上最大の戦争であった。

なかでも長期にわたり人々を苦しめているのは枯葉剤である。米国が枯葉剤を使用したそもそもの目的は、解放戦線の隠れ家であるジャングルを絶滅させ、解放区で作られる農作物を汚染し、食糧を奪うためだったと言われている。

戦争当時、赤十字総裁だったレ・カオ・ダイ医師の著書「ベトナム戦争におけるエージェントオレンジ　歴史と影響」によると、61 年から 10 年間の間に、約 7200 万 ℓ の枯葉剤を米軍は散布した。現在も 2 世,3 世への枯葉剤の影響が指摘され、ベトナム全土で 1 億人超の人口の中の約 300 万人以上の人々が枯葉剤による外形的障害、遺伝疾患やがんなどの後遺障害に苦しんでいると言われている。

また、ベトナム戦争終結後に生まれた子どもたち 15 万人以上に重篤な疾患をもたらしている。

ベトナム政府からの援助はあるが、加害者たる米国からは一切何も補償が無い。

鹿児島JYPF（6 名）一行は、昨年から行っているバクザン省での少数民族学生奨学資金授与及び枯葉剤被害者家庭への慰問訪問を行った。

バクザン省内にある 2 軒の枯葉剤被害者宅を訪問した。1 軒目は **Nguyễn Văn Thuận** グエン　バン　テュアン（1949 年生）さん**（右上写真、左から 2 人目）**。奥さんと子ども、孫一家。娘と息子も被害に苦しみ、孫への影響が出ることを心配しておられた。両親が面倒見ることが叶わなくなると、国の施設に入れてもらわないと生活が出来ない、等の不安を口にされていた。

もう一軒は、Đào Xuân Âu ダオ　スアン　アゥ（1945 年生）宅。最近 2 年間は寝たきりで排泄も妻の手助けが必要。アメリカとの戦争に従軍し枯葉剤を浴びて、その被害に生涯苦しんでいること、等を訴えられた。

ベトナム戦争で使用された枯葉剤の製造が日本企業でも行われたこと。その枯葉剤の未使用分が、日本の林野庁管理の山林に埋めたままであり、自治体が国に対し撤去を求めていることを考えると、米国の責任のみならず、日本の責任も避けてはならないと痛感した。

今回の訪問では、枯葉剤被害の象徴的な方であるグエン・ドクさんとお会いでき、ドクさんに「是非鹿児島に来てお話しの機会を作っていただきたい」と要請してきました。

（記 2025 年 5 月 24 日）

少数民族学生奨学金贈呈

5月2日、この旅の目的であるバクザン省リユックソン中学校を訪問することが出来た。ホテルを出てからしばらくはのどかな田園風景。広々とした田んぼに豊かな米の収穫を予想しながら、日本に研修名目での「出稼ぎ」をしなければならない経済構造はどうなっているのだろうかなどと考えていると、車は徐々に山地に入っていく。途中、石材加工店や木材を薄く剥いだものが多く干してある。ベニヤの材料か？賑やかな朝市を縫って学校へ。

リュックソン中学校に到着。「南部解放 50 周年」で国民の休日また暑い中、わたしたちのために全校生徒・村長はじめ村の役員そして奨学金受領生徒の保護者らが集まってきている。校庭の中央にテントを張ってわたしたちの席をもうけてくれていた。司会の先生の挨拶の後、民族衣装を着た生徒による歓迎の踊りが始まる。わたしたちのために練習してくれたかと思うと感激。 校長先生がこの集会の意味、奨学金をきっかけに勉学の励むと挨拶。続いて、川路訪問団長の挨拶。その後、川路団長・道下さん・本地さんから奨学金・ノート・ボールペンを贈る。20 名の生徒が受け取るため、2 組に分かれて受け取っている。音響機械を設置し、学校にとっての一大行事であることがわかる。最後に**奨学生（下右、写真）**が感謝と学びへの決意を発表してくれた。

授与式終了後、学校の職員と懇談。産業は農業で生活は厳しいこと、遠い生徒は10㎞の道のりを登校していること、水泳が強くメダルを得ていること、経済的理由で登校できない生徒がいること、そして日本でも課題である不登校の生徒がいることなど、通訳を通しながら意見交換が出来た。もっと時間があれば、いやこちらがもっと意思交流の手段があればと思った。（ベトナム語は発音がむずかしい） 意見交換の時には、スイカなどの果物・中にナッツなどの入ったよもぎ餅に似た餅などが出され、大歓迎だった。帰りには、地元の特産の乾麺を大量に頂いた。（大量

すぎて他県の参加者に配るほど）指揮や懇談会を通して、本当に歓迎されまた感謝されていることを感じた。金額を考えると恥ずかしくなるほどだった。本当に必要とされていると実感した。

学校現場で子どもたちと過ごしてきた者として、久々に生き生きとした未来を信じている瞳の子どもたちと出会えて、素晴らしい時間を得ることが出来た。わたしたちが学校を出ようとした時、車まで手を振りに来てくれた。こうした子どもたちの育ちに関われることありがたい。もっと多くの日本からの援助を募っていかなければならないと思う。この訪問旅行を計画し準備していた多くの方々に感謝ながら、これから自分に何が出来るかを問いながら学校を離れた。　（記 2025年5月24日）

JVPF 解放・統一 50 周年記念訪問

～地下司令部跡“クチ”～岩田京子

～抗仏の激戦地デイエンビエンフー～鹿倉泰祐

～200 万人餓死事件慰霊碑参拝～今井智代子

地下司令部跡“クチ”

クチはホーチミンから車で北西に 1 時間半位（70 ㎞）のところにあります。ここには巨大な地下基地があります。インドシナ戦争時にはベトナム人の物資移動のためのトンネルでしたが、ベトナム戦争時に拡大・強化され、住まいや病院、会議室も包含し、数千人のベトコンの生活がこの地下にありました。カンボジア国境まで広がり、長さ約 250 ㎞、深さは 10m（地下 3 階）にも及ぶ巨大な地下基地でした。これをベトコンたちが機械を使わず手で掘っていたというのには大変驚かされます。

トンネルの穴（右写真）は小さく、体の小さいベトコンには動けるサイズでも、体の大きなアメリカ人にとっては非常に動きにくく、トンネルを知り尽くしたベトコンはアメリカ兵を罠に嵌めていきます。

彼らは生活を楽しみ、楽器と歌、娯楽も忘れなかったそうです。青々とした畑と自由、故郷の歌を守るためにどこにでも戦いに行ったそうです。女性も含め、まちのみんなが兵士でした。いつもアメリカ軍をどうやっつけるかを考えていて、様々な落とし穴もつくりました。調理場の煙で居場所が突き止められないように、煙を吸収し、離れた所から少しだけ出ていく等、トンネルの中にたくさんの工夫を施しました。ベトコンの忍耐力、粘り強さ、智恵が滲み出てくる地下基地です。ことごとく嵌められたアメリカ兵は「ベトコンゲリラはどこにも見れないがどこにでもいる。」という表現をしたそうです。

観光案内ではタフなベトコン兵たちのイメージが膨らみましたが、果たして本当にそうだったのかとも考えます。私はベトナムから帰って来てから読んだアメリカ歩兵だったティム・オブライエンの著書で、暗がりの中での戦いがどんなに恐怖に満ちていたか、その恐怖に加え、どこにでもあらわれる敵に、アメリカ兵の精神的なダメージが相当なものだったことを想像しました。それはベトコン兵だって同様だったと思うのです。戦争時の異常な精神状態は、当たり前のように敵を殺します。武器は開発した時点でいつかは使うものになります。枯葉剤も原発もそうです。だから開発してはいけないし、作ってはいけない、持ってはいけないものだと確信します。

クチはトンネルだけでなく、爆弾、戦車、ライフル銃の試弾など、生々しさを残す観光地でした。

（記 2025年5月18日）

抗仏の激戦地デイエンビエンフー

5 月 2 日、私たちは、ディエンビエンフーのベトミン司令部跡を訪問しました。

ディエンビエンフーはベトナム北西部、ラオスとの国境に近い場所に位置し、多くの少数民族が暮らしています。私たちが訪れた観光地や周辺の沿道では、少数民族の人々やその生活を間近で見ることができます。周辺には棚田や変化に富んだ田畑や高床式の家があり、美しい景観が続く山岳地帯です。ベトナム独立同盟会（ベトミン）司令部跡はその山岳地帯の森の中にあります。

日本の世界史の教科書にも登場するディエンビエンフーの戦いは、954 年 3 月から 5 月にかけてフランス植民地軍対ベトミン軍との第一次インドシナ戦争中最大の戦闘地となり、ベトミン軍が勝利し、フランスの植民地支配に終止符が打たれた地です。 昨年 70 周年を迎えました。

ベトミンは、1941年5月、ホー＝チ＝ミンの指導するインドシナ共産党を中心として組織され、ベトナムの独立を目指す民族統一戦線組織で、幅広い組織・団体・個人が結集したとされ、一般に「ベトミン」と言われています。

ベトミンは、1945年8月の日本降伏に伴い、各地で蜂起して政権を樹立（八月革命）し、翌46年に始まるフランス植民地支配との戦いである第1次インドシナ戦争を戦い、ベトナムを勝利に導いています。

私たちは、山の中にある**司令部跡（下写真）**や点在するベトミンの小規模な拠点を歩きながら見学しました。フランス軍にベトミンが勝利した戦闘方式は、ジャングル内に張り巡らした補給路を使った人海戦術が主であったとされ、その指揮を執ったボー＝グェン＝ザップは、後のベトナム戦争でも象徴的存在で「赤いナポレオン」と称され、現在でもベトナムでは人望が高いようです。

私は、ベトナム統一 50 周年を祝う訪問団の一員としてディエンビエンフーを訪れ、ベトナム人民が勝ち取ったベトナムの民族統一・独立の歴史を学ぶことができました。

（記 2025年6月5日）

200 万人餓死事件慰霊碑参拝

日　時　5月3日(土)　13:00　～

慰霊碑は1951年に建設され、犠牲者がお祀りされています。訪問団として**千羽鶴を奉納(下写真)**し、ご住職に読経をいただきお参りしました。 千羽鶴は参加者の鹿倉さんが地元の方の協賛で持参したもの。

1. 200万人餓死事件とは

1944 年 10 月～1945 年5月にかけてベトナム北部で起きた飢饉で、40 万人～200 万人が餓死したと言われています。

2. 餓死事件の背景

(1)第2次世界大戦時の日本の占領政策

日本は、1940 年初めにフランスからベトナムの管理権を任されており事実上日本が支配していました。日本の目的は、フランス領のベトナムを軍事的及び経済的に利用することでした。

具体的には、

①農業政策の変更：フランス植民地時代の強制栽培制度をさらに厳しく適用し、米の代わりに綿などの繊維作物等の戦争用物資の生産を栽培。

一方で、日本本土への年間100万トンのコメの輸出を継続。

②インフラ利用：鉄道や道路等のインフラを日本軍の移動や輸送に使用。

③日本軍が中国で軍事行動をする上で、多くの兵士を養うための食料が必要になり、米や物

資の供給が最優先にされ、現地の農村や住民の負担が増えた。特に、米を強制的な取り立てで、深刻な飢饉を引き起こした。

これらの日本の政策により、現地の資源や労働力を搾

取することで多くの住民が苦境に立たされました。

(2)自然災害の影響

1944 年～1945 年にかけて悪天候、特に、大規模台風による大雨・洪水、冷害等が起き、米の収穫量が激減し、深刻な食糧不足が発生し、農業地帯の荒廃と合わさり深刻な状況が起きました。

この餓死事件は、自然災害の影響もありましたが、「戦争」という事実が日本軍の政策で引き起こされたと言えます。以前、日本軍が中国を侵略した跡地に訪れたことがあります。日本が中国に石炭等の資源を得るために残虐な行為をしてきたことを現地に行き、生存者の方々から聴き、その事実を学びました。ベトナムのこの餓死事件も現地に行かなければ知らなかったことでしたが、この事件の歴史の事実を学び、振り返ることで、二度と戦争を起こさない社会をつくっていかなければならないと痛感しました。

(記 2025 年 5 月 29 日)

2025 春 JVPF 友好訪問団

ハザン省　少数民族学生奨学金支援活動

ViXuyen 郡少数民族学生寄宿学校奨学金贈呈式

1 月 20 日(月)の奨学金贈呈式は、ハザン省日越友好事業の一環として行われていると伺いました。この様な外国での式典に出席させて頂くのは、私の 65 年の人生の中でも初めてなので緊張しました。場所は学校の校庭に作られた屋外ステージで、最前列に並べられた机の席に着席。鎌田団長を中心にして両隣に私のいとこの吉元富士男さん、木原勇さん、何回も訪れている山本さん、越後の国、新潟県から来られた角山さん、皆さん JVPF のメンバーです。そして越前の国、福井県から参加した私。

新参者の私は、とても晴れがましい様な、でも嬉しい様な気持ちでした。立派な横断幕に飾られたステージで繰り広げられる、学生さん達による民族舞踊は圧巻で、歓迎の気持ちがひしひしと伝わって来ました。カラフルな傘などの日本文化にも通じる小道具が興味深かったです。その後、メンバーの中のベトナム人で笛の有名な奏者の方と学生さん達のセッションも素晴らしかったです。最後に学生代表の女の子による感謝のスピーチがありました。すごく私の心に響いたので以下の通りご紹介します。

【私達は長年にわたって継続して頂いている奨学金で小さい頃から皆様の支援に支えられて来ました。奨学金は単なる経済的な支援にとどまらず、困難な状況にある私たちにとって日々の努力に向けて心を奮い立たせる精神的な支柱です。清流のように新たな希望の原動力と成っています。私たちは本当に幸せです。この奨学金は私たちにとって人生の宝物となるでしょう。だからこそ、私たちは以前にも増して奨学金を有効に活用し努力を続けることを誓います。そして将来に向けて社会、地域に貢献出来る人になれるように頑張ります。】

帰国後、テレビのニュース番組で日本で働く外国人労働者の中でも一番多いのがベトナム人で、なんと全体の 25%以上を占めていると知りました。少子高齢化に歯止めがかからない日本。遠くない将来、このベトナムの中学生の皆さんに私たち日本人が助けられる立場になるかも知れないと思いました。そう考えると JVPF の奨学金プロジェクトは本当に意義の有るものだと思います。

帰国時に少数民族学校から寄贈された、中越国境を描いた立派な**風景画(上写真)**を、私が頂くことになり光栄で

す。早速、弊社ビル一階のバレエスタジオに飾らせて頂きました。

（付記）東京・練馬区立大泉中学校より申出の**寄付金（左写真、受取り確認する副校長）**を木原勇さんがヴィスエン少数民族寄宿学校に届けました。

（記　前田春彦（2025 年 2 月 12 日）

ViXuyen 郡公立中学校少数民族学生奨学金贈呈式

この日は午後からの少数民族寄宿学校（高校）の支援奨学金贈呈式に続き、公立中学校に訪問しました。公立中学校の奨学金支援は寄宿学校の支援とは異なり、毎年各学年（4学年）の選考された生徒に贈られる奨学金です。学年5人×4学年×2,000,000 ドンの 5 か年計画で始まったもので今年は 2 年目になります。これは「未来を築く教育基金」から JVPF が委託された事業です。この基金は日本にきてまだ 56 年（本人曰く。えっ？56 年でまだなの？）の Lưỡng さん、 Mình さんご夫妻が設立したもので、日本で貿易の仕事をしているそうで野菜の種を扱っていると言ってました。何か母国の役に立ちたいという思いから設立に至ったそうです。

さて贈呈式は子どもたちの熱烈な歓迎から始まりました。両サイドに子どもたちが並び拍手されてステージ前まで行くという感じでした。日本ではそんなことはないので、私もうきうきしてしまいました。ここは昨年もそうだったのですが子どもたちみんな人懐っこくフレンドリーで楽しい式典になりました。その後はステージで子どもたちが素敵な踊り、民族衣装、民族衣装をアレンジした服装のファッションショーを披露してくれました。男の子も女の子も民族衣装がとてもきれいでした。

ショーが終わり、贈呈式に入りました。Lưỡng さん、Mình さんご夫妻は昨年は都合で出席できませんでしたが、今年はスケジュールを調整して出席し20人の子どもたち一人一人に奨学金の贈呈をしました。印象的だったのが奥様の Mình さんが子どもたちにハグして励ましている姿がとても微笑ましかったです。

また昨年日本で行われた公立中学校でのベトナムアンサンブルコンサートでの保護者からの寄付金を JVPF から寄贈しました。

生徒の代表から「貴重な奨学金を有意義にするため、私たちは一生懸命勉強し期待を裏切ることのないように頑張ります。」という言葉をもらいました。

贈呈式の後は訪問団の一員の**吉元さん（下右写真）**のマジックショーを行い、子どもたちは目を白黒させて不思議そうに大喜びでした。次に書道をしている**角山さん（下左写真）**のその場で漢字を書いてプレゼントする企画。こちらは昨年は行列ができるほど盛況でしたが、今年も昨年同様盛況で子どもたちは書いてもらった字を宝物でも扱うように大事にしていました。

式典が終了し、またまたかわいい子どもたちの大声援の見送りの中、会場を後にしました。私たちの支援活動がこの純粋で健気な子どもたちの将来の役にたって、子どもたちが立派に成長することを願います。

（記　山本利治　2025 年 2 月 26 日）

2025 春 JVPF 友好訪問団

枯葉剤被害者慰問・調査
～ハザン省、トウエンクアン省で～

被害者貧困家庭支援“仁愛の家”寄贈活動

2025 春 JVPF ベトナム友好の旅は、1 月 18 日（土）から 23 日（木）の日程で、一行 15 人で催行されました。その 2 日目 19 日にハノイからハザン省にバスで移動し、ヴィスエン郡の枯葉剤被害者支援「仁愛の家」寄贈地を視察しました。

Hoang Ngoc Cam（左写真の右、左は角山さん）；1954 年生まれ。タイ族。住所：ハザン省。1971年、入隊し戦場 B（南部）へ。 1972年、中部クアンチの戦場へ。1973年1月、除隊し故郷へ。帰国後、結婚し、子どもは1987年生まれの末息子のホアン・ゴック・トゥイを含む 6 人の子供（息子五人、娘一人）。妻とは 9 年前に死別。子供は全員家をはなれて独立。

本人は有毒化学物質の影響を受け心臓病を患う。神経異常の末っ子のトゥイとその子供の世話をしなければならず貧困。

寄贈された家は 1 カ月で完成、部屋は 3 室。しかし私たちが見たところ室内にキッチンやシャワー、トイレなど見当たらず。広さは充分だが、とにかく雨露しのげるだけの家という印象を受けました。

彼は私たちに「軍隊は夜移動して辛かった、今は家も出来て安心している、自分で、棺桶も手作りで用意してある

ので、死ぬのはこわくない、食事は自分で作っている、政府からは年金もらえない、食費や光熱費は、息子たちからもらっている」と話してくれました。戦地にいた頃を証明する資料が無いため、無年金とのこと。そのため雨もりの心配の無いこの家に住めることが本当に安心できることなのだろう、と感じました。

（記　角山優子　2025 年 2 月 1 日）

トウエンクアン省枯葉剤被害者家庭慰問　1 軒目
～　見て・聴いて・感じて　～

2025 年 1 月 21 日（火）午後 3 時 20 分、ツエンクアン省枯葉剤被害者の家庭慰問を行いました。

バスを降りた先には、広い庭の片隅に二台のバイク・自転車が並べてあり、住宅は二階建て、玄関脇の植栽には清潔感を感じました。家主に家の中へと招かれ、リビング正面に大きな祭壇・大型テレビがあり、リビング中央に大型テーブル二台とイスは 20 人が座れる配置になっていました。テーブルには、接待用ベトナム茶器が用意され、普段

から、多くの人が出入りすると認識しました。

家主は、**Nguyen・Van・Hoa さん(下写真の中央でプレゼント持つ男性)**、男性（1952 年生:72 歳）。住所：トウエンクアン市 An Tuong 坊第8集落。妻は、グェイ・トゥイー・ビンさん、女性（1953 年生:71 歳）。家族構成は、息子 3 人、娘 2 人で、お子さんたちは、全員結婚されていました。

グェイ・バン・ファーさんは 1974～82 年まで従軍。1974～76 年は、ファンチ村（現在のフータイ町。ラオス近くの中部）、その後北部のカラハン（中国国境付近）に 1982 年までいて除隊。軍では、化学専門部隊に所属。自身もダイオキシンを何回も直接浴びていました。除隊後は、化学工場に勤務。主に薬品の仕事をして、ダイオキシンがどこに撒かれたか等、分析・調査も行っていました。その後、故郷に戻り現在の農業をやっています。自身は、白血病を患っているので、定期的に病院を受診しています。

子ども達は、長女（1977 年生）、長男（1980 年生）、二女（1981 年生）、二男（1983 年生）、三男（1984 年生）の 5人。孫は、10 人います。長男の子どもには、先天性の障害があり、下肢障害と言語障害があります。5 人の内の二男家族と現在同居しています。二男の男の子には、脳障害・精神障害がありますが、枯葉剤の影響とは認められていません。障害を持った孫に対しては、国から月 160 万ドン（9,600 円）と私（グェイ・バン・ファーさん）は、月 558 万ドン（33,500 円）国からお金が出ています。

他の子ども達家族もこの近所に住んでいます。一緒に、畑作業をしています。ここの土地も含めて、自分の所有になります。

最後に参加者からの質問で「他に障害（ダイオキシンによる被害）を持った子どもたち（孫も含む）はいませんか」との質問に「妊娠時に、羊水検査を受けて判断をします」との回答があり、二男の子の時までは、羊水検査が無かったとのことです。

訪問を終えて、改めて、障害を持った子どもを支えている家族は、子どもの成長と合わせその将来の行く末を話していました。メディアは、ベトナム戦争・枯葉剤被害に対して、触れなくなったが、枯葉剤被害の影響は、今もなお続いており、支援活動も道半ばと痛感した。

（記　木原　勇　2025 年 2 月 17 日）

トウエンクアン省枯葉剤被害者家庭慰問　2 軒目

1 月 21 日、トウエンクアン市の枯葉剤被害者家庭への調査慰問に行きました。訪問した家には女性と小学生くらいの男の子供さんがいました。住所：トウエンクアン市 Luang Vuong 社第 8 部落。

女性はブーさん 1969 年生まれ、夫の **Vu Thi Thai**(タイ)さんが約 3 か月前にお亡くなりになられたとのことでした。夫のタイさんは 1956 年生まれで 1974～1981 年の間ベトナム戦争に出征しておられました。ブーさんは夫が従軍中どこでどのようなことをされていたのかは知らされていませんでした。

終戦後家に戻り農業を営み 1994 年に結婚し翌年長男が生まれました。しばらくして長男の体に異常があることがわかり診断を受けたところ枯葉剤後遺症と判明しました。長男はろうあ者と診断されました。そしてタイさんも診断を受けたところ枯葉剤後遺症に侵されていることが初めて判明しました。その症状は手足がしびれ失神するというものでした。ご夫婦にはその後 3 人の女の子が生まれましたが長女は軽度の後遺症があり仕事に就くことができず、次女は足が歪曲するという症状が発生し、三女には現在症状は見られないということです。また4人のお孫さんについては現在後遺症は見られないということでした。

自宅は 2014 年に政府により建造された家です。また後遺症に対する政府の補助金は夫が生存していた時は年間 200 万ドンあったものが今はなくなり、現在は長男に対し 100 万ドン支給されています。**長男(下写真の右、左は母親)**は日常生活をするにも介護が必要な状態ですが国や民間の支援システムが整っていない現状です。

訪問中近所の女性の方がこの家族に寄り添って話をされていました。その方が買い物や介護など生活面の支援をボランティアでしてくだっているとのことでした。

（記　吉元富士男　2025 年 2 月 25 日）